

やま
お山の
ライネヨウ

写真・文 戸塚学

監修 小宮輝之



偕成社



空気がうすいせいか、太陽が出てると、シャツ1枚でも暑いのに、
風が吹きはじめて太陽が雲にかくれると、急に寒くなった。

山小屋へもどろう、と歩きだしたとき、
ふと気配を感じてふりかえると、なんとそこにライチョウがいた！

手をのばせば、さわれそうな距離。写真を撮っても、逃げない。
こんな野鳥は、はじめてだった。

この出会い以来、ぼくはすっかりライチョウのとりこになり、
気がつけば20年以上も、立山でライチョウの撮影を続けている。

ふゆばね
冬羽
オス



ふゆばね
冬羽
メス

オス・メスともに雪に擬態しているといわれる。

ライチョウは年に3回、「換羽」といって、羽が生えかわる。
ほとんどの日本の鳥は、換羽は年に2回だから、ライチョウは特別だ。

冬羽は、オスもメスも雪景色に溶けこむ、全身まっ白。

夏羽は、オスは黒と白、メスは黄色と白。

秋羽は、オスもメスも、ほぼ全身が黒っぽい灰色になる。

秋羽から冬羽にかわるころ、ライチョウは、足のうらまで羽毛でおおわれる。

羽毛は、足を寒さから守り、雪の上を歩きやすくする「かんじき」の役目もするんだ。

足のうらまで羽毛でおおわれるのも、日本の鳥ではライチョウだけだ。

そして、11月中旬になると、高山の上のほうは雪におおわれてしまうので、
標高1800～2000メートルの樹林帯に下りてきて、群れをつくって春を待つ。

あきばね
秋羽
オス



いづみ
岩の上のオス。

あきばね
秋羽
メス

オス・メスともに岩に擬態しているといわれる。



なつばね
夏羽
オス

ひなを連れ歩くメスは草むらに、オスは上から見たすがたが岩に、それぞれ擬態しているといわれる。



なつばね
夏羽
メス

足のうらまで羽毛におおわれている。





かし、ここにきて、ライチョウに緊急事態が起きている。

2015年、北アルプスの東天井岳周辺で、ひながニホンザルにおそわれたんだ。

ぼくは以前、長野県で7年ほどニホンザルをねらって撮影していたこともあり、最初、この事実がまったく信じられなかった。

ニホンザルはもっと標高の低い場所にいるのに、なぜ高山にいたんだろう？

雑食性とはいえ、おもに食べるのは植物の葉や実で、

昆虫を食べるのは、ぼくも見たことがあるけれど、鳥を食べるのは見たことがない。

高山で、なにが起こっているんだろう？ 疑問はどんどん大きくなった。

そこでいろいろ調べてみると……

なんと、あの「地球温暖化」が大きくなっていることがわかってきた。

地球温暖化の影響で気温が上がり、山の雪がすくなくなると、

いままで高山にいなかった動物たちが、高山へ入ってきやすくなるんだ。

すると、その動物たちが、ライチョウの天敵や、

食べ物をめぐってライバルになる可能性があるというわけだ。



ライチョウの域外保全では、各地の動物園で飼育練習として、北欧のノルウェーからスパー
 ルバルライチョウの卵をもらい、東京の上野動物園でふ化させることになった。
 スパールバルライチョウは飼育技術が確立しているうえ、日本のライチョウと同じ種だから
 だ。いちばん北にすものがスパールバルライチョウ、南にすものが日本のライチョウなんだ。



ノルウェーからといた、スパールバルライチョウの卵 (2008年)。写真提供/小宮輝之

スパールバルライチョウの23個の卵からは、
 5羽のかわいいひなが生まれた。



上野動物園ではじめてふ化した、スパールバルライチョウのひな。写真提供/小宮輝之



うして上野動物園で生まれた、スパールバルライチョウのひなはすくすく育ち、
 一般公開もされた。その2年後には、富山県の富山市ファミリーパークでも
 スパールバルライチョウの卵のふ化に成功した。

そして2015年、いよいよ乗鞍岳からもってきた日本のライチョウの
 卵10個を、上野動物園と、富山市ファミリーパークで
 5個ずつ受け入れることになった。

その結果、9羽のひながふ化したけれど、
 そのうちの6羽は死んでしまった。
 さらに、のこった3羽はすべて
 オスだったので、園内での
 繁殖はできなかった。



ふ化から7か月後のスパールバルライチョウ (オス)。写真提供/小宮輝之